



「世界津波の日」2024 高校生サミット in 熊本 報告

2024年10月22日から24日の3日間、熊本市の熊本城ホールで開催された「世界津波の日」高校生サミット2024in 熊本に本校1年次3名が参加してきました。

「世界津波の日」高校生サミットとは？

「世界津波の日」(11月5日)の制定は、古くは安政元年(1854年)11月5日に和歌山県で起きた大津波の際に、村人が自らの収穫した稲むらに火をつけることで早期に警報を発し、村人を避難させたことにより多くの命を救い、被災地のより良い復興に尽力した「稲むらの火」の逸話に由来しています。2011年の東日本大震災における未曾有の津波被害を受けて、2015年の国連総会で日本が提唱し、採択されました。翌2016年からサミットが始まり、これまでに、高知県、沖縄県、和歌山県、北海道、新潟県で開催されています。サミットには世界各国の多くの高校生が参加し、自然災害の脅威や対策を学び、議論するとともに、交流を通じてお互いのきずなを深めています。

【1日目 10月22日】移動日

初日は熊本までの移動でほぼ時間を費やしました。新千歳空港に8:30に集合し、東京羽田空港経由で飛行機を乗り継ぎ、約8時間掛けて熊本市にあるホテルに到着しました。札幌に比べて熊本は非常に暑く、上着を着ていると汗ばむくらいの陽気でした。長時間の移動で生徒もさすがに疲れていましたが、次の日のプレゼンテーションの練習をしてから就寝しました。

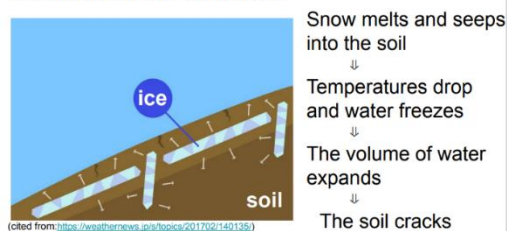
【2日目 10月23日】サミット1日目

サミットは、熊本城ホールと呼ばれる熊本城からほど近い立派な会場で行われました。各学校は指定されたグループに分かれて参加することになっており、本校の3名はグループGに配当され、新潟県の高田高校、奈良県の育英高校、三重県の津工業高校、熊本県の宇土高校、熊本北高校、モンゴルのArvis School、韓国のSongdo High School、ツバルのMotufoua Secondary Schoolと協働で分科会を進めることになりました。事前に分かっていたことですが、本校はプレゼンテーションのトップバッターとなっており、生徒たちには一様に緊張の色が見えます。他校が高校2年生や3年生で構成されているのに



に対して、本校は1年次の3名がプレゼンテーションを行います。極度の緊張の中、自己紹介から始まったプレゼンテーションでしたが、「Kumamoto is very hot.」の一言が会場の笑いを誘い、少し緊張が和らいだ様子でした。私たちのプレゼンテーションは都市における土砂災害

Mechanism of Landslide



に関するもので、学校が土砂災害発生警戒区域に指定されているところから始まり、冬の雪崩による土砂災害も心配されるという可能性を示しました。さらに、土砂崩れのメカニズムについて説明をし、札幌では雪解けの起こる春先に土砂災害が起こる危険性が高いことを伝えました。その上で減災という観点で取り組めるアクションプランを、①家族間においては、避難経路や非常用品の確認をはじめとする防災会議、②地域間においては、学校の体育館における地域の防災教室の開催の観点から提案しました。8分ほどの時間でしたが、3週間以上英語科の先生につきっきりで放課後、ご指導をいただきながら練習に取り組んできた成果が十分に発揮されていたと思います。いくつか質疑・応答の準備もしてはいたのですが、質疑・応答の時間は設けられなかったため少し安堵の表情になったように見えました。その後は、各校が入り混じった形のグループに分かれ、減災に関するディスカッションを行いました。各グループにおいては、先ほど行われたプレゼンテーションの内容からキーワードを付箋にメモしておき、その後は、海外の



3校を含む他校の発表を聴講しました。学校ごとに津波、温暖化による干ばつ、海面上昇など、災害の種類は異なり、それぞれの災害に対する様々な減災のアイデアの提言がなされました。特に、三重県の津工業高校が提案した海底に柱を定期的に並べ、津波の威力を軽減させるアイデアについては、本校の生徒も関心を寄せていました。

昼食を摂り、午後は分科会の続きを行った後、開会式となりました。開会式においては、国連防災機関(UNDRR)や石破総理大臣からもメッセージがあり、このサミットの意義を再確認できました。総会の後半には、能登半島の震災および奥能登における豪雨で被災された石川県の高校生の体験を直接聞くことができ、会場一同防災や減災、支援の必要性に対して決意を新たにしていました。

夕方にはレセプションがあり、日航ホテルに会場を移して夕食を食べながら、地域や諸外国の伝統芸能の鑑賞を楽しみました。最も盛り上がったのは、熊本県を代表するゆるキャラ「くまモン」が登場した時で、国を問わず高校生たちがステージに駆け寄り姿を見て、「くまモン」は世界中で人気のあるキャラクターであることを実感しました。

【3日目 10月24日】サミット2日目



サミット2日目は、記念植樹および記念碑除幕式から始まりました。参加者全員が熊本城ホールの外にある広場に集まり、サミット開催の記念植樹および記念碑除幕式を行いました。その後は熊本城ホールに戻り、昨日分科会でを行ったディスカッションにおける各グループのアイデアがそれぞれの代表によって発表され、国の垣根を超えたすばらしいアイデアが提唱されました。中でも、「Nature for Nature」と名付けたマングローブの植林による津波の被害の軽減など、人工物ではなく自然を効果的に活用した防災のアイデアは、すばらしいアイデアだと感じました。フライトの時間の都合で、閉会式は

途中で中座する形になってしまいましたが、後ほど流れた地元のニュースによると、各国の参加生徒からは「命が何よりも大事だと学びました。専門家やリーダーが自然災害に忠告を出すときには注意を向けないといけない」、「台湾やトルコで大きな地震が発生したり大雨災害が発生したりするなか自然災害とたたかうときには国際的な連帯が必要だ」、「多くの国の人と交流できて貴重な経験になります。日本が災害に対してどう備えているかなどを学び、持ち帰りたい」などの感想や意見が出され、参加した生徒たちの中にグローバルな視点で災害に対応していくための心構えができていたように思えます。帰りの飛行機の中では、3人もさすがに疲労の色を隠せませんでした。3日間の体験は、後の感想にも書いてある通りこれからの学習に向かう上で大切なことを3人に教えてくれたように思います。

【サミットに参加して】

サミットに参加する前は、このように大規模な国際的なイベントが毎年行われていることを知らなかったのですが、実際に参加して、英語でのアイデアの交流を超えたすばらしいコミュニティの創造が図られる大会であることを認識できました。日本のような災害大国であっても、実際に災害を経験するまではその危険性や緊急時の行動等についてほとんど認識せずに過ごしている状況が多いと思いますが、このように各国の災害の状況や具体的な体験や行動について知ることによって、その意識を高めることができると思います。そしてそれを世界規模で手を取り合って、解決方法を模索していくという取組は正に防災・減災のグローバル化そのものであり、これからの時代を生き抜く地球人として必要な素養であると感じました。現在、各国の教育において盛んに探究の重要性が叫ばれていますが、一人ひとりがこのようなマインドを持ちグローバルな視点で課題解決を図るために探究的に学んでいく事が、VUCAと呼ばれる先の見えない世の中で人々がウェルビーイングを追求していく手立ての一つとなり得ると感じました。3人の生徒は、1年次という事に臆せず他校の先輩たちに積極的に話しかけていました。今後、SSHの活動を通してさらに活躍の場を広げていってほしいと思います。



【参加した生徒の感想】

私たちは自分たちで調べたことや経験を基にしかプレゼンテーションを行うことができませんでしたが、他校はフィールドワークやインタビュー、実際に自分たちで活動をしたことを発表しており、実際に高校生でも災害に対して減災という面で行動を起こせると感じ、一層実際の行動に移したいと思うようになりました。また、他校の、プレゼンにおける伝えるための英語の能力の高さに驚かされました。グループディスカッションにおいては、完璧な英語ではなかったものの、グループ全員が伝えたいことやそれに対する熱意を持っており、協力しながら楽しんで有意義なディスカッションをすることができました。また、それぞれの地域の特性についても伝え合い、世界には様々な環境とそれによって引き起こされる災害があるのだと実感することができました。

今回のサミットを通して、英語はあくまでも伝えたいことを伝えるための手段であり、発音が完璧でなければいけないわけでも、文法を間違えてはいけないわけでもないということが体感できました。どんなに拙い英語でも、伝えたいことがあり、それに対する熱意が相手に伝われば相手も自分の言いたいことを汲み取り、伝えることができるということを体感しました。つたない英語でも十分楽しめましたが、もっとできたらもっと楽しめるだろうと感じました。今回の経験が私の英語学習の大きなモチベーションとなりました。3日間、大変貴重な経験でした。

同じグループの人が優しくゆっくりと話してくれたため、英語をしっかりと聞き取ることができた。自分の発言ではあまり伝えたいことを文章化することができなかつたが、単語ごとに話す、ジェスチャーを用いるなどしてなんとかコミュニケーションを取ることができた。しかし文章で話せるようになったほうが将来的にも良いため、今後はスピーキングもしっかりと行っていきたい。また、参加していた外国人とも積極的に会話できたら更に良かったと感じた。開会式は、演奏の披露や熊本の踊り・手話の体験ができ、非常に楽しい式であった。参加国紹介ではその数の多さに、津波サミットが国際的に知られていること、自分がこのような大規模なサミットに参加しているのだということを改めて実感した。また、司会・議長の話していることをなるべく正確に聞き取ろうと試みた。多種多様なプレゼン内容で新たなことを知れたものが多く、どのグループも英語を使って流暢に話していたのが非常に印象に残った。自分も発表者たちのように、大勢の前で英語力を発揮できるような人になりたいと心から思った。分科会後のレセプションでは、現地の高校生や韓国の高中生と会話・写真撮影をしたり、ステージで行われていた参加国の民謡を楽しんだりマスコットキャラクターとふれ合ったりなど、有意義な時間を過ごすことができた。また2日目の記念植樹についても、参加国が未来を願って植樹している光景を目に焼き付けることができた。

数ヶ月前から話し合いを重ね、伝わりやすいスライドと伝えたい内容を精査しながら作成した。内容に関して家族や友人からの感想をもらったり、北海道の気候という特色に目を向けて考えたりすることができた。よりプレゼンテーションの完成度を上げるため、英語の先生、ALTの先生からのアドバイスを積極的に取り入れた。当日はトップバッターという緊張感のある中での発表だったが、前日まで練習した通りの成果を上げられたと感じた。他校の発表から、新しい知識や自分の考えとのちがいを発見したりすることができた。ある程度災害についての単語を予習していったおかげで、他の人の話す英語をスムーズに理解することができた。グループディスカッションは一つ年上の男の子が中心となって、グループで1つのボードを完成させた。意見がうまく伝えられないこともあったが、身振り手振りを使ったり、単語を羅列したりするだけでも伝わるものと思った。総会は自分のグループ以外からの発表を聞く機会だったが、やはり英語の能力の高い外国人が登壇することが多かった。得意分野を活かすという意味では国際分業という単語を思い浮かべた。発表内容は地域ごとに異なるかと思われたが、災害から身を守るという視点に立ったときに「コミュニティを大切にする」などと考えるのは、世界共通かもしれないと考えた。特にインパクトが強かったことは、モンゴルの少女たちが「日本語の名前」と称してそれぞれの日本語のニックネームを決めていたことだ。私と同じ班の少女は「にじ」と名乗り、その隣の班のほうは「えび」と名乗った。親日派なのだろうかと考えた。